

マックス・ウェーバー著、梶山力・大塚久雄訳「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 上巻」岩波書店、1955年3月5日刊を読む

## エーツス(Ethos)とは

1. (1) ウェーバーが本書で用いている特徴的な語に「エーツス」(Ethos)というのがある。  
(2) この語はしばしば「倫理的性格」、「倫理的雰囲気」などとも訳されているが、本訳書では  
考えるところあってこときらに原語のままとしておいた。  
(3) それで、その釈明をもかねて、ウェーバーにおけるこの語の用語法を、とくに「倫理」(Ethik)  
という語のそれと対比しながら、ここで簡単に説明しておくこととしよう。  
(4) 「エーツス」と「倫理」とはもちろん用語法の上で深い関連をもっており、その意味内容が  
重要な点で相重なり合っているので、両者を相互に取り換えてもほとんど支障を来さないよう  
な場合さえしばしば見出されるほどである。  
(5) しかも両者の用語法のあいだには或る決定的な相違点が存するのであって、このことは読者  
が本書を読まれる場合充分注意される必要があるのではないかと思う。
2. (1) そうした点を明らかにするために、「エーツス」という語に関するウェーバーの具体的な用  
語例のうち特徴的なものをいくつかあげてみる。  
(2) まず「エーツス」とも云いうところをしばしば「心的態度」(英訳 attitude)「倫理的態  
度」「生活の仕方」「人間」などと云いかえているばかりでなく、さらに「エーツス」に関連  
して「倫理の衣服をまとった一定の生活型式」「経営者の魂をうごかしている精神」また「労  
働意欲」などという表現をも用いている。
3. 以上だけからでもさしあたって次のようなことが推論されるであろう。
  - (1) 「倫理」という語がすぐれて規範を意味し、教義と関連せしめられているのに対して、「エ  
ーツス」という語の概念構成においては、そのような「倫理」が、たとえばさきに見た営利欲  
の場合などと同じように、人々のうちにやどり、彼らを内側から一定の方向に押しうごかして  
いくところのいわば現実の起動力としてとらえられている。
  - (2) 「倫理的性格」とか「倫理的雰囲気」と訳されるのもそのためであろう。
4. (1) こうして歴史上或る特定の「エーツス」の担い手たちは、その環境にたいして、いわば自分  
の血となり肉となっている「倫理」の特質にしたがって特定の反応或いは作用の仕方を示すこ  
とになるのであり、その意味で「エーツス」は「人間」とも「心的態度」とも云いかえること  
ができる。  
(2) しかし、それは単に受動的な「心的態度」に止まるのではなく、そこには人類の歴史に対する  
或る能動的なもの、ウェーバー的に表現すれば「構成的」(konstitutiv)に作用するところの

要因をも含んでいる。

(3) 「エーストス」が単なる社会「心理」としてでなく、深く「倫理」と関連せしめつつ捉えられている所以であろう。

5. (1) それはともかくとして、「倫理」が単に Sollen の面において規範意識としてでなく、むしろ「エーストス」として、すなわち人々を内側から押し動かすところの起動力として Sein の面において捉えられるにいたったということは方法論上かなり重要な意義をもっている。

(2) というのは、こうした方法上の操作を経てはじめて、「倫理」を単なる目的論的関連を超えた因果関連の平面において客観的に考察することが可能なのであり、したがって、「ピュアリタニズムの倫理」と「資本主義の精神」との間に存する客観的関連の社会学的把握という本書の中心テーマも、「エーストス」という方法概念によってはじめて可能となっている、と云わなければなければならない。

P147～149

### <コメント>

「エーストス」とは

1. (1) 「心的態度」(2) 「倫理的態度」(3) 「生活の仕方」
2. (1) 「倫理の衣服をまとった一定の生活型式」  
(2) 「経営者の魂をうごかしている精神」  
(3) 「労働意欲」
3. (1) 「倫理」とは「すぐれて規範」を意味し、教義と関連せしめられている  
(2) 「エーストス」とは、そのような倫理が、営利欲の場合などと同じように、彼らを内側から一定の方向に押しうごかしていく、いわば現実の起動力としてとらえられている。  
……などなど。

大塚久雄先生による本書の解説も一語一語勉強になる。社会科学の古典中の古典である本書を、一語一語ていねいに学びたい。

2019年3月22日(金)林明夫